

予習による教育改革をすすめよう！

久保 齋・出版記念講演会 報告

図書 啓展(まじょひろのび)

久保先生が、「予習展開による 国語科 授業づくり」(小学館)を出版されました。

手前味噌にならぬよう、アマゾンでのブックレビューを紹介します。

「久保氏の十冊目の著書」

予習は学習能力の高い子どもにしか適しない、現場には適しないという考えを否定している。

それは学力的には厳しい子どもこそ、予習課題を与えることで、学習に対する準備ができ、授業にもスムーズに参加できるといふことである。ここでも過去の著作と同様、授業で学級をつくるという久保氏の主張が貫かれている。

前著の『愛することを教える』もそうなのだが、久保氏の提案はいつも新しい。表面的な取り組みや実践は他の教育書と違いは大きくないように見えても、意味づけや解釈が一步も二歩も踏み込んで

でいるので、学ぶところがある。単なるハウツー本では全くない。

現場を離れて四年経つということだが、今なお、学校現場に入り、時に子ども達と格闘しながら、新しい提案を行う著者に敬意を表したい。」

四月二十二日(土)にこの出版記念講演会が行われ、遠くは東京・大分からも参加、皆で四五名が集う熱い集会になりました。

● 深沢英雄 和歌山大教育学部特任教授
この本には、宝が二つある。

一つ目は、「予習を科学した」ということである。中心課題の予習のやり方、一人読み深めの予習のやり方を示し、ストップ&ディスカッションなど授業の方法を誰でもできるように提案している。

二つ目は、失敗を書いていることである。「公開授業当日、ここで過ちを犯してしま

いました。…」(「こんぎつね」P六七)

● 久保齋 「先生のための学校」校長

・すべての先生が一步前進する授業改善。

・授業に対して予習をしてくる子を育てる。

・BCD群の子どもたちの脳を活性化させる。

・教えたい、という思いを持って教える。

・これだけでクラスは変わる。拙くても自分の教材解釈を持ち、書くこと。

・予習発問は授業の主要課題を与え、ノート半ページの文章化を課す。

・子どものでしてくる予習にお墨付きは与えない。赤線を引いたり○をしたりしない。

・発言をする子のイメージ。こんな風にしたらうまくつながる。(P六一)

・予習(主体的)↓授業で交流(対話的)・再び学んだことを書く(主体的)↓再び交流(対話的)。(このように、「書く」を国語科

の中核にすえる。話の質を高めるのは書くことである。

・発言者は発言するときはノートを見ない。

・聞くときはノートを開き、比べながら聞く。

・予習が適しているのは、国語科と社会科。

・学校の授業改善の先頭に立つよう。